

の美しいこと！ 天の川って、本当に「川」でした。日本の子どもたちにもいろいろの意味で、テント泊登山をお薦めしたいですね。

大自然と寄り添いながら、ゆっくりとしたリズムで暮らしているブータンの人々は、とても穏やかな、満ち足りた表情をしていました。お年寄りも、顔の皺一つ一つに人生が刻まれ、いい味を出しています。中には、トレッキングの途中にすれ違ふと、被っていた帽子を取って挨拶をするという丁寧なおじいさんも。山岳地帯の厳しい環境で暮らす遊牧民にも、悲惨さを感じ



いたる所に仏塔が建てられ、ダルシンと呼ばれる白い布の経文旗が風にはためき、観光客をも敬虔な気持ちにさせます。仏教と伝統文化が人々の生活に深く溶け込んでいて、中世にタイムスリップしたかのような錯覚に陥ってしまいます。

私が参加したトレッキングは、ブータン唯一の飛行場のあるパロの町から、7314メートルのチョモラリが見えるベースキャンプ(4000メートル)まで、一日平均20キロを走破、往復で6泊7日(すべてテント泊)という行程。至れり尽くせりの大名トレッキングで、ガイド、コック、馬飼いが同行し、持ち物や食材、調理器具、テントなどの荷物は馬がすべて運んでくれます。

一日のスケジュールは、7時ぐらいに朝食をとり始めて、その1時間後に出発。コックや馬は後片付けをしてからキャンプ地を出ます。1時間に5分ぐらいの休憩を取りながら予定ルートを進みますが、途中であとから出発したコックと馬に追い抜かれ、彼らは先に次のキャンプ地に行つて準備します。午後4時ごろにその日のキャンプ地に着いたときには、すでにテントが設置されているという極楽サービス。食事は朝・昼・晩ともコックが作ってくれ、温かいブータン料理で、トレッキングの7日間、一度たりとも同じメニューが出てきたことはありません！ 標



れませんでした。子どもたちはカメラを向けると、本当にいい笑顔を返してくれます。人に物を渡すときに必ず両手を添えるという仕草に、はっとさせられました。また、ブータンの男女の間柄はともにおおらかで、戸口近くの外壁に豊穡祈願の名残なのか、ペニスの絵が描かれている家も多く、目のやり場に困ったぐらいです。

ブータンには、国の物質的・経済的



①トレッキング中、7314メートルのチョモラリが堪能できる。②ブータンは仏教国で、出家して仏門に入る子供も多い。③カメラを向けると満ち足りた笑顔が返ってくる。干してあるのはヤクの肉。④山の夕食。毎日違うメニューが出た。⑤ヤクは、荷役、乳、肉、毛皮と、ブータンの人々の暮らしになくてはならない家畜。  
©日本UNHCR協会

な豊かさを示す指標の「GNP(Gross National Product・国民総生産)」に代わる考え方として、「GNH(Gross National Happiness・国民総幸福)」という考え方があります。ブータンのシグメ・センゲ・ワンチュック第4代国王が提唱した概念で、ブータンの開発が目指すのは、物質的な豊かさの成長よりも、国民の幸福や満足度の向上であるという開発哲学です。ブータンの人々の満ち足りた表情は、「もっと、もっと」とより多くを求めるのではなく、身の丈にあった期待値を知っていることからくるものなかもしれません。



根本かおる  
ねもと・かおる ● 東京大学法学部卒。テレビ局入社後にフルブライト奨学生としてコロンビア大学大学院へ留学。修士号取得後、1996年からUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)勤務。トルコ、ブルンジ、コンゴ、ジュネーブ本部、ネパール事務所などを経て、2007年6月より、UNHCRの公式支援窓口、日本UNHCR協会事務局長。

こんな素晴らしい国なのに、ブータンは人口の6分の1が国を追われ、17年もネパールの難民キャンプで避難生活を強いられるという難民問題を抱えています。民族的にも宗教的にも主流派ブータン人とは異なる、ブータン南部のネパール系住民たちが、ブータン政府の民族主義的政策でブータン国籍を剥奪され、国を追われたのですが、ブータンへの帰還のめどは立っていません。また、ブータンで道路工事など、いわゆる「3K」の仕事に携わっているのは、ほとんどネパール系の人々かインドからの出稼ぎ労働者だと聞きます。

私は一年半、ネパールでブータン難民への支援活動に従事しましたが、難民の子どもたちはまだ見ぬ祖国ブータンに帰れる日が来ることを祈っています。難民となった人々が故郷に帰れる環境をつくらずして、GNHはありえない——ブータンにはこの問題から目を背けることなく、真の国民総幸福を実現してもらいたいと願っています。

「ブー、ブー」——ヤクの荒々しい鼻息で、真夜中に目を覚ました。ここはヒマラヤの標高4000メートルの地点にあるベースキャンプで、ヤクの放牧場のど真ん中。私たちが眠るテントのすぐ傍にまでヤクが迫り、テントに突進されないかと気が気ではありませんでした。「お願いだから、テントをつぶさないで」と祈るような思いでいると、鼻息は遠のき、ほっと胸を撫で下ろしましたが、しばらくするとまた、「ブー、ブー」が近づいてきます。

この秋、休暇でヒマラヤ山脈の東端にある仏教王国、ブータンに行き、ヤクのある標高3000〜4000メートルの山岳地帯をテントに泊まりながらトレッキングしました。ブータンは人口約65万、面積は九州とほぼ同じという小王国。近代に至るまで鎖国に近い政策をとっていたこともあり、極彩色のチベット系密教を信奉する仏教文化を色濃く残した国で、「シャングリラ」と称されることもあります。

国土のほとんどが山岳地帯で、交通網の整備や電化は遅れ、その分、今なお「昔」の雰囲気を残しています。ブータンの男性は日本のドテラにも似た「ゴ」を、女性は幅1・5メートル、縦2・5メートルぐらいの布を巻き付けるようにして着込む「キラ」を普段から着用し、建築もすべて伝統様式にのっとるよう法律で定められています。

いたる所に仏塔が建てられ、ダルシンと呼ばれる白い布の経文旗が風にはためき、観光客をも敬虔な気持ちにさせます。仏教と伝統文化が人々の生活に深く溶け込んでいて、中世にタイムスリップしたかのような錯覚に陥ってしまいます。

私が参加したトレッキングは、ブータン唯一の飛行場のあるパロの町から、7314メートルのチョモラリが見えるベースキャンプ(4000メートル)まで、一日平均20キロを走破、往復で6泊7日(すべてテント泊)という行程。至れり尽くせりの大名トレッキングで、ガイド、コック、馬飼いが同行し、持ち物や食材、調理器具、テントなどの荷物は馬がすべて運んでくれます。

一日のスケジュールは、7時ぐらいに朝食をとり始めて、その1時間後に出発。コックや馬は後片付けをしてからキャンプ地を出ます。1時間に5分ぐらいの休憩を取りながら予定ルートを進みますが、途中であとから出発したコックと馬に追い抜かれ、彼らは先に次のキャンプ地に行つて準備します。午後4時ごろにその日のキャンプ地に着いたときには、すでにテントが設置されているという極楽サービス。食事は朝・昼・晩ともコックが作ってくれ、温かいブータン料理で、トレッキングの7日間、一度たりとも同じメニューが出てきたことはありません！ 標

高4000メートルのチョモラリ・ベースキャンプで、コックさんがスポンジケーキを焼いて出してくれたのは感動ものでした。

ただし、シャワーはないので、体はタオルで拭くぐらい。もちろん、髪もトレッキング中は洗えません。飲み水以外は、朝、お湯を洗面器に一杯もらえるだけで、これで歯を磨き、顔を洗うのです。難民支援活動のために、電気も水も無いような場所で援助要員と

して勤務してきたので、余り辛くは思いませんでした。

よく分かったのは、何が人間の生活に最も大切かということ。そう、水、食べ物、そして、あたたかい寝床があれば、人間は生きていけるのです。このようなベーシックな環境の中では、山の美しさや空の青さ、紅葉のあざやかさ、日の光のきらめきが、一層印象深く感じられました。夜も電気が一切無い「漆黒の闇」ですから、なんと星

## volume 5 世界の子どもたち 身の丈を知るといふ豊かさ、ブータンの暮らしから 私たちが学ぶこと

国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の公式支援窓口、日本UNHCR協会事務局長の根本かおるさんは、休暇を利用してブータンを訪問。物質的、経済的な豊かさではない、幸福の尺度をもつ暮らしを目の当たりにしました。未来の子どもたちに、残していくべき豊かさとは？

文…根本かおる

